

入院処置要望書

一・陰茎切断手術

計画期間一週間。

依頼人・たま洗い風俗（――）

患者・葉月（二十六）

健斗（二十四）

ひなた（二十二）

「今日からは三人一緒ですね」

「そうだね。ちよつとハードだけど頑張ろう」

「はい」

今日の手術は特別な手術だ。契約のある風俗店に入店した新人の陰茎切断手術。しかも手術前の最終射精からスタートする。

「カメラ用意しておいて」

「もうできてます」

「さすが」

今日来院する三人は、たま洗い風俗と言われる風俗の新人。そこは客の身体を陰囊を使って洗う店だ。だから邪魔になる陰茎は切断してしまう。尿道口はそのまま、ペニスがあった場所から変える必要はない。たま洗い風俗では陰囊で客の身体を洗った後、尿道口からお湯を出して泡を洗い流すのでそのままの方が都合がいいのだ。

陰囊は当然そのまま弄らないし、尿道口を付け替える必要もない。単に陰茎を切り落として縫合すればいいだけなのでそれほど大変な手術ではないのだけれど――。

「先生、三人来られました」

「じゃあ大部屋に通して」

「はい」

カメラと、それから透明の貫通型オナホールを持って三人の待つ大部屋に向かう。そこは「大部屋」と言いながらも普通の部屋と大して変わらない。単に、キングサイズのベッドが二つ並んでいるというだけの部屋だ。他はその他の病室と全く同じ。

「失礼します」

ドアを開けてすぐのところには付き添いの男が一人いた。けれどカメラマンであるその男は軽く頭を下げるだけ。ここでは全て任されているので気にもならない。

「こんにちは」

ソファに並んで座る三人の表情は硬かった。内容は聞いているはずなので、緊張しているのだらう。

「医師の大内です。彼は看護師の狭山。よろしくね」

「……宜しくお願いします」

唯一口を開いたのは最年長の葉月《はつき》だった。

「宜しく。じゃあ、もう聞いているとは思うけど今からもう一度今日の流れについて説明をします。手術の順番は早く射精できた人から始めます」

そう言うと、知っていたはずなのに三人は少しだけ驚いた表情を見せた。

「……あれ、聞いてない？」

まさか、と思いかメラマンの男を見る。けれど男はすでに撮影を始めており、反応を返してくることはなかった。

「聞いてないです」

またしても口を開いたのは葉月だった。自分がすっかりしなければと思っているのかもしれない。

「そうか。じゃあ説明するね。射精はこれ。このオナホールを使ってしてもらいます。サイズは事前にお店から聞いたみんなのペニスのサイズに合わせてある。だからちゃんと気持ち良くなれる大きさなので、条件は平等。で、これが人生最後の気持ちいい射精になるかな。まあ、お尻でイける子もいるかもしれないけど、ペニスを抜いていくのは当然これが最後。人生最後の男としての射精。で、早く射精した人から手術でペニスを切り落とします」

ここで一度言葉を区切り三人のリアクションを窺う。けれど誰も何も言わなかった。

「で、手術について。まず一人目は全身麻酔。だから寝ている間に痛いことは全部終わってる。しかも、亀頭を使ってクリトリスを付けるよ。なので少しだけ気持ちいいところを残せる。で、二人目。二人目は局所麻酔。だから意識がある状態でペニスを切り落とされる。でも、二人目もクリトリスは作る。で、最後。一番射精が遅かった子は、局所麻酔でしかもギロチンで切り落とす。もちろんクリトリスはないので、ペニスはかけらも残らずにさようなら」

三人は顔色を青ざめさせた。やはり聞いていなかったらしい。きつとリアルな映像を撮りたいのだろう。この風俗は嗜虐趣味の客が集まることで有名なのだ。

「オナホールはこれ、透明で貫通型なのでずるはできない。いくときはちゃんと亀頭を……まあ、先っぼだけでもいいからオナホールから出して、飛び出す精液が見えるようにいくこと。じゃないと射精したと判断ができないからね」

普通なら射精後の萎え具合でも分かるが、恐怖で萎えてしまう子も当然いる。そんなときは精液の臭いでも分かるのだけれどそれは言わずに聞いた。

「何か質問は？」

「……時間制限とかは……」

疑問を口にしたのは健斗《けんと》。可愛らしい顔つきだ。年齢は三人の真ん中だけれど、顔

だけ見れば一番若くも見える。でもちよつと強気っぽい感じもある。

「それは、何時間経っても三人が射精できなかった場合ってことかな」

「はい」

「三人とも射精するまでずっと待つよ。最後の一人も、最後になったからと言って切り上げることはしない。何と言っても人生最後の射精だからね。そこはちゃんと楽しんでもらうよ」

慈悲ではない。人生最後という最高の快楽を与えて、気分をどん底に落とすためだ。もう二度とこの快感を得ることはできない——その絶望の表情はイッた瞬間の恍惚とした表情の直後に現れる。カメラマンはそれを撮るがためにいる。ちなみにその動画はボーイの宣伝動画として使われるらしい。

「他に質問は？」

恐怖で頭が回らないのだろうか。でもこの風俗は変な勧誘や脅しは一切していない。三人は自ら望んでここに来たはずだ。実際誰一人帰ろうとはしていない。

「……あ、言い忘れてたけど、最後の一人は射精の翌日の手術になります。最初と二番目は射精当日の手術だから」

理由を言う必要はないだろう。その身になれば誰でも分かる。一晚、ペニスの切断への恐怖を味わわせるためだ。

(……いい趣味した店だよほんと……)

じゃあ、あとは頼むね、と狭山に行つてから部屋を出る。次は手術の準備だ。しばらく狭山が三人に掛かりきりになってしまうので、ギロチンの準備も自分でしなければならぬ。

(実入りはいんだけどねえ……)

絶望の中の射精を待つ狭山の精神的負担は大きいだろう。これが終わったらしばらく予約は入れさせていない。入った金で旅行にでも連れ出すか、と手術準備室のドアを開けた。

※ ※ ※

葉月の場合——。

「はい、葉月くんはこれをどうぞ」

渡されたオナホール。それは明らかに三つのうち、一番小さなものだった。

「じゃあ皆、服を脱いでベッドに上がってください」

怖い。とにかく怖い。勃起なんてできそうにない。でも、しなければ。少しでも早く。誰よりも早く。

自分が最年長ということは分かっている。けれど、それでも局所麻酔やギロチンは怖い。それに二人は若いから、イクのだって早いだろう。そう思うとどうしても気持ちは急いでしまう。

言われた通り服を脱ぎ、全裸になって過去見たこともないほど大きなベッドに身体を上げる。

「じゃあ皆内側を向いてください」

隣に座った健斗との距離は二メートル。少し距離があるようだけれど、足の置き方によっては

ぶつかるかもしれない距離だ。

横一列に並んだ状態から少し場所をずらし、なんとなく二人が向き合うようにする。

「はい、それで結構です。ではローションをお渡ししますので、自分の好みの量を使ってください」

狭山と紹介された男から渡された小さなボトル。ラベルには何も書かれていないが傾けると中身はゆっくと動いた。

「人生最後の射精ということで、恐怖もあると思います。でも、これが本当に最後ですから。だから、たくさん気持ち良くなってください。たくさんえっちな声を出して、手術のことなど一度忘れてとにかく無我夢中で気持ち良くなること。カメラは皆さんのいやらしいところをしっかりと撮っています。この動画で皆さんの今後の指名率が変わると言っても過言ではない、とお店の方はおっしゃっていました。くどいようですが本場に最後の射精です。大事に大事に、そして楽しんでください。皆さんのペニスの写真や動画はちゃんと残って、そして皆に観てもらえます。いやらしければいやらしいほど再生数は伸びて、皆さんのペニスがあったという事実はいろんな人の記憶に残ります。きつと、皆さんが失ったペニスを見ながら自身のペニスを抜く客もいるでしょう。そんないやらしいことに使われる射精だということを忘れずに扱ってください」

狭山の言葉は胸に響いた。これが本当に、本当に最後の射精になってしまうのだ。そう思うと後悔は——いや、ない。ペニスをなくして、たま洗い風俗で客を洗うのだ。陰囊で「しごとと客の身体を洗って金を稼ぐのだ。」

「では、始めてください」  
まるで試験のような始まり——そんなことを考えているうちに他の二人はオナホールにローションボトルの先を突っ込んで流し込んでいた。慌ててキャップを開け、オナホールの中をローションで満たす。自分の小さなペニスに見合った小さなホールだ。少し入れただけですぐにいっぱいになってしまう。

（この短小とももうお別れだ……）

あんなにコンプレックスだった短小ペニス。でもこれで本当になくなってしまうのだと思うと寂しく感じてしまう。

（いや、ダメだ、余計なことは考えない……）

とにかく今は一番に射精をしなければ。狭山は楽しめと言ったけれど、そんな余裕はない。局所麻酔でペニスを切断されるなんて発狂してしまいそうだ。きつと暴れてしまう。それに怖い。暴れたってどうせ拘束されているのだろうし、そう思うとやはり発狂する可能性の方が高い。それにクリトリスも欲しい。亀頭の一部だけでも残れば快感を得られるだろうし、なによりクリトリスならこの短小の面影もなく性感帯を作ってもらえるということだ。そんなに素晴らしいことってない。

（……勃起……！ 起て！）

考え事をしながらだからだろうか。手で擦ってみてもペニスは勃起しない。やばい、と焦りが生まれる。顔を上げて二人を見ると、すでに勃起しているようでオナホールを必死に擦っていた。

(若いからか……)

そう思うものの、葉月もまだ二十六だ。世間ではまだ十分若い部類に入るだろう。

目を閉じて、必死にいやらしいことを考える。短小が恥ずかしくて性交経験は一度もない。だからエロ漫画や動画のイメージしか浮かばないけれど、なぜか今浮かぶのは自分の手術後の身体だった。今の身体のまま、ペニスだけがなくなっている。上手にイメージできるのは入店前に店のホームページのボーイ紹介を見たからだろう。どれも皆、すごくいやらしく見えた。ぼっかり開いた尿道口の下にぶら下がる陰囊。ペニスはもろろんない。そんな身体で客の身体を跨ぎ、陰囊を擦りつけて洗っている。

(あっ……やば……)

むくむくとペニスが起ち上がってきた。気持ちいい。

客の身体を洗い終えた後は洗顔だ。ソープマットに寝転んでもらい、それから顔を跨いで陰囊で優しく擦る。顔だから、身体よりも優しく。だから腰を振るのではなく、きちんと自分で陰囊を持って、そつと擦るのだ。きつとすごく感じてしまうだろう。でも感じていることはきつとバレはしない。だって男の象徴はな……い——

「ああっ！」

びゆる、と精液が弾けた。慌ててオナホールを見る。幸い根元に押し込むようにして射精していた。

「上手に射精できましたね」

狭山はすぐに近寄ってきた。そして上から射精したばかりのペニスをじっと見下ろしている。

「……人生最後の射精は気持ち良かったですか？」

「あ……」

そうだった。忘れていた。

(もつと……楽しめばよかった……)

狭山の一言で射精の快感、幸福感なんて一瞬で消え失せてしまった。感じるのは絶望と後悔だけ。どうしてこんなにすぐにイってしまったのだろう。しかも想像していたのはペニスを切り落とした後の自分の姿だ。ちゃんと、ペニスがあるのを想像して射精すればよかった。それに妄想に集中するために目も瞑ってしまった。ペニスを擦るのは最後だったのだからちゃんと目を開けて、しっかりとペニスの勃起の様子や精液を吐き出す瞬間を見ておけばよかった。

「葉月くん。どうでしたか、最後の射精は」

「……気持ち良かったです……」

すごく良かった。あんなに早くイってしまったのは初めてだと思っくらい。

多分、人目があったからだ。人に見られながらのオナニーだったから。それに動画まで撮影されて。だから興奮してしまった。自分の恥ずかしい姿を皆が見ている——そしてこれからも観られ続けるのだと思ったら。

「では行きましょう」

「え……？」

「手術です。上手に射精できましたから、眠っている間に終わりますよ」

くくく

「痛い……痛いよお……」

「痛いね……」

痛い。すごく痛い。これで痛み止めが入っているなんて信じられないくらいに痛い。でも痛い  
と泣くと、隣のベッドに寝ている葉月がそうだね、と声を掛けてくれる。優しい葉月。

「痛い……うう……おちんちん痛いよお……」

もうペニスがないことは分かっているけれど、それでもペニスが痛いと感じる。これがファン  
トムペインというものなのだろうか。

「あれ、ひなたくんはペニスのことおちんちんって呼んでるの？ 可愛いね」

「え……？」

「ふふ。おちんちんって言い方とっても似合う。可愛い」

「あ……葉月さん……」

「ひなたくんは最後の射精、どういう風に出したの？」

どうやら会話で痛みを紛らわせようとしてくれてるらしい。本当に優しい人だ。自分だって  
痛いはずなのに。

「えと……」

ぐす、と鼻を一啜りしてから思い出す。

「ぼく、乳首で射精するのが好きなんです。一年も掛けてやっと乳首で射精できるようになった  
から、だからもうおちんちん触ってしまわないようにと思って手術……だから、乳首でしようと  
思ったんですけど、最後だしと思って乳首とおちんちんどっちも弄って射精しました」

「そうなんだ。すごいな、乳首でイけるなんて」

「最初は全然イけなくて苦しかったんですけど、でもその苦しさも気持ち良くて」

「ひなたくんはMなんだね」

「はい……恥ずかしいですけど」

「可愛いと思うよ」

「あれ、葉月さんはMじゃないんですか」

たま洗い風俗に勤めようとするくらいだから当然Mだと思っていた。

「ぼくはどうかなあ……。でも少なくとも自分で自分を痛め付けるっていうか、苦しめるのはで  
きないかな」

「そうなんですか」

ひなたは自分で自分を虐め抜いた。手術で退路を断つという考え方もそれだろう。

「でも、最後にペニス弄っちゃってよかったの？ ペニスの気持ち良さ思い出しちゃわなかつ  
た？」

「思い出しちゃったけど……今は痛くて全然えつちな気持ちにならないけど、もしかしたらまたおちんちん弄りたいって思っちゃうかもしれません」

「つらくないの？」

「それが好きなんです」と言うと、葉月はくすくすと笑った。笑い方まで優しい。こんな穏やかで優しいお兄さんに自分もなれるだろうか、と考えてしまう。

「じゃあ、これからたまにおちんちん気持ちいいよねって言ってあげる」

「あ……」

ぞくりとした。葉月はSなのかもしれない。だって、こんな優しい人なのに。

「お願いします……」

素直に言うと、また優しく笑われた。

「……ペニス、もうないんだよね」

しばらくの無言の後、小さな声で葉月が言った。

「……ない、ですね」

「ひなたくんは局所麻酔でしょう？ 見たの？」

「はい。鏡で見ながらおちんちんにバイバイありがとうって思いながら受けました」

「すごいな……見ていて怖くなかった？」

「怖かったけど、感謝の気持ちの方が大きかったです」

「そう……ならひなたくんのおちんちんは幸せだね」

「そう……なのかな」

葉月は自分の話をしてはこない。吐き出させようとしてくれているのか、それとも言いたくないからなのか分からず悩む。

「……ぼく、おちんちん大きくて。たくさん虐められたかったのに、入れてほしいとか羨ましいとか言われてつらかったんです」

「……そう」

暗い声だった。言っではいけないことだったのか、と焦る。

「あ、あの……」

どうしよう。掛ける言葉が見つからない。なんと言えばいいのだろう。どうしようどうしよう、優しい人を傷付けてしまったかもしれない——そう思っている。葉月がまた言葉を発した。

「ぼくね、すごく小さかったんだ。親指くらい。だから誰にも見せられなくて。正直やっぱりひなたくんのペニスが大きかったなら羨ましいなって思っちゃうけど、でもない物ねだりだよ。ぼくもペニスが大きかったらひなたくんのように悩んだかもしれないし、それにもう、ぼくたちにはペニスがなくてもいい」

「……はい、一緒です。ぼくたち、可愛いクリトリスつけてもらったんですから」

「あ、そっか。ひなたくんにもクリトリスがあるんだよね。それも見たの？」

やっぱり優しい人だ。ちゃんと、自分のことも話した上で気にさせないようにと会話の雰囲気も変えてくれた。

「はい、見ました。会話ができたので、クリトリスの皮をどうするか、って聞かれたりして」

「あ、それはぼくも麻酔の前に聞かれたな。ぼくは普通の皮にしてくださいって言ったよ。ひなたくんは？」

「ぼくは……皮、いらないですって言いました」

「えっ……つらくないの……？ 亀頭だよ？」

葉月が驚くのも無理はない。医師も狭山も驚いていたくらいだから。

「はい。でもぼく……やっぱ自分を虐めたくて。本当はクリトリスもいらないって言ったんですけど、それは店に言われているからって。だったら敏感で苦しいくらいの方がいいなと思って剥き出しのクリトリスにしてみました」

「そうなんだ……下着、擦れちゃうと痛いかもよ」

「はい。でもいいんです。どっちにしろいらないものだから、絆創膏でも貼っちゃおうと思ってっ」

「えっ、クリトリスに絆創膏？ それってすごくえっちだね」

「傷が治ったら、絆創膏を貼ったクリトリス見てくださいか？」

優しさに甘えすぎだろうか。そう思うものの葉月との関係を今回の入院だけで断ち切りたくなかった。

「もちろん！ あ、でも貼ってあげたいな。剥き出しの敏感なクリトリスをじっくり見てから、守るために絆創膏を貼ってあげたい」

くくく

「おちんちんに会いたい……？」

手術室で寝転んで医師を待つこと三十分。葉月とひなたの回診を終えた医師は、狭山から聞いて首を傾げた。

「はい。葉月さんとひなたくんからお願いされました。こー」

そう言って、丸くくり抜かれたシートから露出したペニスを狭山が抓む。

「一度も見たことがないんだそうです」

「ああ……真性だね。それに皮も伸びてる。床オナしたな？」

「はい」

まるで同世代のような口調で話す医師に苦笑しながら頷いて返す。

(本当だ……先生も優しそう)

「うーん……そうだなあ……確かにこれじゃ切らないと見えないな……でも最後のチャンス……か。……狭山、彼は？」

「外にいます」

「落とす瞬間は来るよな」

「はい」



最初は意味が分からなかった。けれど話が進むにつれて理解できるようになった。医師が言った彼とはカメラマンのことだ。通常手術室には入らないのかもしれないが、ギロチン切断ということでは刃が落ちるところは証拠として撮っておくのもかもしれない。

「包茎手術は依頼内容にないから……」

医師が悩んでいる。確かに医師としては予定外の手術になってしまおうのだろう。

「……先生」

落ち着いたと思っていたのに、やはり緊張しているらしい。声は掠れ、震えていた。

「ん？」

「……我儘言っすみません。いいんです。どうせ、俺はちんこあったってどうせ手術できなかつたし。だからどっちにしろ死ぬまで見るはずがないものだったんです」

だって、恥ずかしくて包茎手術に行けなかったのだ。だから同じだ。

「うーん……」

もういいです、と言っても医師はまだ悩み続けた——いや、考えてくれていた。

「よし。切ろう」

「え？」

「どうせ落としちゃうし、見栄えはいいでしょ、中さえ見えれば。先の皮の部分だけ麻酔して、さくつと裏側切って剥こう。それならどうにかなるから」

「え……でも……」

いいのだろうか。この病院代は全て店の払いだ。余計な手術なんてして問題が起きたらと思うと申し訳ない。

「いいよ。それくらい。だって本当に最後だよ。もうどんなに見たくても、切り落としたペニスなんて燃えるゴミだよ。でも捨てる前にちょっとくらい撫でてやっただって罰は当たらないよ」

ゴミ扱い……と思ったのは一瞬で、その言い方さえ医師の気遣いだということはずぐに分かる。

「でもカメラマン、時間測ってるかもしれないから。とにかく急ぐよ」

「はい。ありがとうございます！」

「あ、けど悪臭かもしれないから、それは頑張ってる」

医師が笑い、手早く狭山が用意した注射を皮の先に打った。

「ごめん、痛いね。でも時間ないから」

「大丈夫です」

身体を切るだけじゃなくて、心まで大事にしてくれる先生だった。嬉しい。この病院で本当によかった。でも何より、こうなったのは葉月とひなたが狭山にお願いしてくれたからだ。自分からは絶対に言い出せなかった。

「さ、切るよ。……よし。血、大丈夫？」

「はい」

狭山に背中を抱えられて起こされた。裏筋を切ったらしく、上から見ても切り口は見えない。

「よし、剥くよ。最初に最後の露出だ」

医師は慣れた手つきで皮を押した。けれどなかなか剥けない。

「癒着してるな。狭山、洗浄」

「はい」

包皮輪から挿入された液体。冷たい、というのは亀頭の感覚で分かった。けれどしつかり麻酔が効いているせいか痛みは感じない。

「よし、悪い、ちよっと強引に剥くけど」

「大丈夫です」

痛みがあるのは皮だろう。けれど麻酔で感覚はない。

医師はそれでもゆっくりと丁寧に剥いてくれた。

「わ……………くさっ」

「はは、この白いのが恥垢な。ほら、初めましてだよ」

医師がさっきの液体で亀頭を流してくれた。初めて見る亀頭は白いのがたくさんついていて強烈な悪臭を放ってはいたけれど、可愛かった。

「……………可愛い……………」

「ええ、可愛い亀頭ですね。ちよっと拭きますね。敏感だからつらいかもしれないけれど、頑張っつて」

狭山がコットンで優しく亀頭を拭ってくれた。刺激が強くて腰が引ける。けれど唇を嚙んで刺激に耐えた。

「うん……………まあこれでいいだろう。ほら、健斗くん、撫でてごらん」

「え……………いいんですか？」

だつて触ってはいけないからと昨夜は貞操帯を付けたまま眠ったのだ。なのに。

「いいよ。ほら、俺らしか見てないから。産まれたてで敏感だから、優しくな」

医師は皮を押さえたまま言ってくれた。ゆっくりと手を伸ばして、初めての亀頭に触れる。

「わ……………」

弾力、というのだろうか。柔らかいのに、もちっとしている。

「ちよっと勃起したな。初めての自由な勃起はどうだ」

「気持ちいいです……………すごい……………」

でも、こんなことなら恥ずかしいなんて思わずに包茎手術に行けばよかった。そしたら今頃、この可愛い亀頭を撫でながら射精できていたかもしれないのに。

「……………健斗くん、」

「狭山。いいよ」

きつと時間が押しているのだろう。

「……………大内先生、狭山さん、ありがとうございます。もう満足しました。亀頭も見れて、触れて……………先生に剥いてもらって、狭山さんに綺麗にしてもらって、もう大満足です。本当にありがとうございました」

涙がぼろ、と落ちた。

ずっと卑屈だった。包茎のせいで恋人も作れなくて。友達と泊まりで遊びに行くこともできなくて。そんな突っ張っていた気持ち完全に崩壊した。ここの皆は本当に優しい。医師も狭山も葉月もひなたも、皆優しい。温かい。

「……健斗くん……」

「健斗くん、本当にいいのか」

「はい。皆に優しくしてもらって、亀頭も喜んでます」

そう言うと医師は小さく微笑んだ。

そして、体勢変更の指示。言われた通り、腰を上げて手術台の上で膝を着く。

「ここ……ここに入れて」

医師が手を離れた途端、亀頭は皮の中に隠れた。でもそれでいい。今からカメラマンが入ってきたら、医師がしてくれた優しさがバレてしまうかもしれない。

「はい」

時間がない。少しでも医師や狭山が疑われたりしないように急いで穴にペニスを差し込む。

「……怖いだろう」

「……いえ、もう大丈夫です。今は満足感の方が強いっていうか、嬉しくて」

「……そうか。じゃあ麻酔をするよ」

「はい、お願いします」

強がりではない。本当に思っていたよりも気分が楽になっていた。昨夜はあんなに怖くて仕方がなかったのに。やはり亀頭を撫でた高揚感だろうか。

「ちくつとするよ」

「はい」

色んな所に数本注射を打たれた。次第に感覚がなくなっていく。

「大丈夫ですか」

「……はい……」

声が震えてしまった。麻酔が効いたら、いよいよだと実感が湧いてきてしまった。

(怖い……)

怖い。でももう逃げられない。狭山は気に掛けながらもギロチンに付けられたベルトを背中に回して固定している。きつと怖くて腰を引いてしまうことがあるのだろう。でももう逃げられない。身体は完全にギロチンに固定されてしまった。

「ペニスを触るよ」

「はい……」

怖い。怖い怖い。

「……どうかな、感覚は？」

「ないです……」

全く何も感じない。つまりは痛みも感じないということだけど、きつと刃が落ちる衝撃は分かるだろう。

「怖いっ……」

「うん、怖いな……でも大丈夫、一瞬だよ。でも手術中、パニックになるとまずいからすぐに足を固定するから」

「……はい……」

「なるべく……暴れないように頑張ってくださいね」

「……はい……」

どうなるのだろうか。自分は落ち着いていられるのだろうか。

「……狭山、彼を入れて」

「はい」

狭山が離れて行った。カメラマンを呼びに行ったのだろう。

「……怖いな……でも、痛みはないから」

「……はい……」

「下、見えるか。ペニスの先つぼ。恐怖で勃起して、頑張って顔を出そうとしてる」

「あ……」

「可愛いな。切り落とされるなんて知らず、健気に大きくなるうとしてるよ」

「あ……ああ……」

ふるふるとペニスが震えている。怯えているのかもしれない。可哀想なペニス。ずっと硬い床に擦りつけられ、外の空気に触れることすらできなかったペニス。やっと出してもらえたと思っただのに、もう切り落とされてしまう。

(でも……)

それでも、最後に撫でることができた。今回のことがなければ死ぬまで見ることも触れることも叶わなかった亀頭。だからいい。大丈夫。

「深呼吸してみようか」

「はい……」

吸って、吐いて。それを何度か繰り返すと、手術着に着替えたカメラマンが入ってきた。

「では陰茎切断手術を始めます。宜しくお願いします」

「宜しく……お願いします……」

もしかしたら今の挨拶は狭山に向けたものだったのかもしれない。でも言ってしまった。医師と狭山が驚いたようにこちらを向いて、それから安心させる笑みをくれた。

「では健斗くん、今から刃を落としますからね」

「はい……」

「大丈夫、痛みはないですよ。刃が落ちたら、そのまま目を瞑っててください。すぐに背中ベルトを外しますから、そのまま台に横になって」

「はい……」

「大丈夫……一緒にいますからね。終わったら病室に戻って、応援してくれた二人に頑張ったよって言いましょうね」

「はい」

そうだ、二人にはお礼を言わなくては。二人のおかげで最後に亀頭を見られたこと。汚れを拭いてもらって、撫でることもできたこと。

「じゃあ、健斗くん……深呼吸してください」

くくく

「では布を折り畳んで尿道に当ててください。不安ならまだ布はありますから増やせますよ」

「あ、ぼく……欲しいです」

手を出すと狭山は布を追加してくれた。すでに渡されていた布をそれで包むようにして吸収量を増やす。

「ではおしっこをしてみてください。出せた人からベッドに戻っていいですよ」

「はい……」

でも、いきなり言われてもなかなか出ない。尿意はあるけれど、傷が沁みるのも怖い。

「ヒナちゃん、手繋ごうか」

「え……？」

「怖いんですよ。片手なら繋げるから」

葉月が手を差し出してくれた。嬉しくて、すぐに手を繋いでもらう。それから深呼吸して尿意に意識を向けた。

けれどやはり出せない。出したいという気持ちはあるのにまるで栓がされているみたい。

「出ないよお……」

不安になって隣を見ると、葉月も、反対側の健斗ももう布を黄色に染め始めていた。

「ううっ……」

どうして自分だけ。シャワーのときもそうだった。自分だけ怖がって、手を貸してもらわないとできなかった。恥ずかしい。この中で一番年下とはいええ、もう二十二歳なのに。

「うう……出ないよお……」

でも出ない。どうして出ないのだろう。まさか本当に塞がってしまったのかもかもしれない——布を外して、あまり見たくないなと思いつつ傷口を覗く。

「ひっ……」

グロかった。そこはまだ赤く腫れていて、縫合箇所が黒くなっていた。いや、黒い糸を使っていただけなのかもしれないけれど、どちらにしてもグロい。

「ヒナ、ちよっと待ってろ」

左を見ると、健斗が濡れた布を狭山の持つ袋に入れて手を洗っているところだった。

「葉月さんもう終わってるから。俺が手、繋いでやるし」

「あ……」

右を見ると葉月が困ったように微笑んでいた。

「ごめっ……」

「いいよ。大丈夫。すぐ戻るからちょっと待っててね」

どうして二人とも優しいのだろう。なのに迷惑ばかりかけて泣きそうになってしまう。

(でも泣かない……!)

頑張って出す。排尿ができないと困るし、お客さんを洗った後は尿道からお湯を出して泡を洗い流すと聞いている。だからちゃんと出せるようにならないと。

葉月はすぐに戻ってきた。そして手を差し出してくれる。

「ヒナちゃん、手、繋ごうね」

けれど今、片手は健斗が繋いでくれている。もう片方は当然布を尿道口に押し付けている。

「ヒナ、俺が布持ってやるから」

そう言われ、そのまま布を奪われてしまう。そして目の前に健斗が膝を着いた。ちょうど視線の真ん前には露出する尿道口。傷薬を塗ってもらったりもしているのに、やはり近くで見られると恥ずかしい。

「やあ……」

「大丈夫、塞がってないよ。ちゃんとおしっここの穴見えてる。出せるから、頑張れ」

前編です。約4万文字。

宜しくお願い致します。